

主体性を育む環境構成と援助の工夫 ～幼児理解に基づいた保育実践を通して～

那覇市立大道こども園 保育教諭 与儀 守貴

I テーマ設定理由

中央教育審議会「幼児教育部会における審議の取りまとめ」（2016）（以下審議の取りまとめ）で幼児教育においても「主体的・対話的で深い学び」の実現に向かうことの重要性が述べられている。その中で、主体的な学びのプロセスについては「周囲の環境に興味や関心を持って積極的に働き掛け、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って、期待を持ちながら次につなげる学びが実現できているか」という視点を持って捉えるということの大切さが示されている。このような視点を持ち、幼児の遊びの過程の質を捉え、幼児理解と予想に基づき、計画的に環境を構成することが一層重要になってくる。また、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下教育・保育要領）の第1章の第2の2（3）オ「見通しや振り返りの工夫」においては「園児が次の活動に期待や意欲をもつことができるよう、園児の実態を踏まえながら、保育教諭等や他の園児と共に遊びや生活の中で見通しを持ったり振り返ったりするよう工夫すること」と記載されている。これらのことから、幼児理解と発達の過程に応じた環境構成と援助の工夫が、園児が自らの遊びを振り返り、次の活動に期待や意欲を持ち、見通しを持って取り組む姿等に繋がり、主体性を育む上で重要だと考えられる。

本学級（5歳児）の実態として、多くの園児が様々な環境に自ら関わり遊ぶ姿が見られる。一方で、自ら遊び始めることができなかつたり、学級での集まりに参加できなかつたりと、集団生活において主体的な関わりが得意でない園児もいる。このような姿の違いは、これまでの発達の過程において、園児が見通しや期待を持って活動や遊びに組み、充実感や満足感を十分に得ることができなかったことが要因の一つとして考えられる。

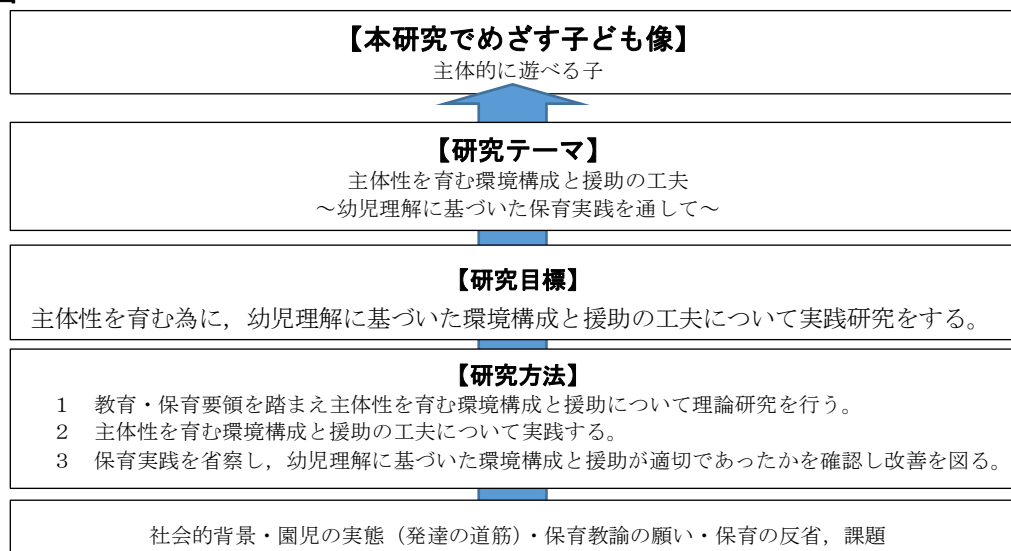
私自身の実践を振り返ると、環境構成や援助において、幼児理解と園児の発達を見通した計画が十分でない為に、園児の主体性が発揮されない場面が多くあった。園児の主体性を育む為には、幼児理解や発達の過程に応じた保育教諭の意図的、計画的な環境構成と援助の工夫により、園児自身が周囲の環境に興味関心を持って働き掛け、それぞれの遊びや活動を自分のこととして捉える必要があると考えた。また、援助のひとつとして、遊びを通して感じたことや考えたことを言葉で表現する場を遊びの直後に設けることで、次の遊びの見通しや期待に繋がるのではないかと考える。

そこで、これからの時期（6月～7月）に興味や関心が高まりやすい、水を使った遊びにおいて、幼児理解に基づいた意図的、計画的な環境構成と援助の工夫により、園児が遊びや活動に見通しや期待を持って取り組むことが、主体性の育ちに繋がるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

主体性を育む為、幼児理解に基づいた環境構成と援助の工夫について実践研究をする。

Ⅲ 研究構想図



Ⅳ 研究内容

1 主体性について

(1) 幼児期の主体性

主体性とは「保育用語辞典（2016）」では「他によって導かれず、自分の感情・思考を柔軟にコントロールし自ら行動する性質を指す」と記されている。教育・保育要領解説において、主体性が育まれる保育とは「環境を通して行う教育及び保育」であり、「身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる」という幼児教育における見方・考え方を生かし、教育及び保育が展開されることと示されている。

よって、本研究では、園児が「自分から関わる」「自分で遊びを展開する」「自分で選ぶ」「試行錯誤する」「繰り返す」「思いや考えを言葉で表現する」等自ら周囲の環境に関わり、幼児期に必要な経験を積み重ねていく姿を主体性とし、研究を進めていく。

(2) 幼児期の主体的に遊ぶ姿

教育・保育要領解説において、主体的な活動とは「園児が興味関心を持ち、思わず関わりたくなるような人やもの、事柄があり、さらに興味や関心が高まり、意欲が引き出され、意味のある体験をすることができるように適切に構成された環境の下で生じる。」と記されている。

秋田（2017）は主体的な遊びは「安定感や安心感が遊び出しにおいて重要な必要条件」で、「興味や関心を持って自発的に遊び出して自信や自己肯定感を持ち、遊びが繰り返し発展し展開していくことで、子どもが主体的になるという道筋がある」と述べている。このことから、本研究において主体的に遊ぶ姿とは、園児が安定した情緒の下、自発的に遊び出し、遊びに没頭し、遊びを繰り返す姿と捉える。

(3) 幼児期の「主体的・対話的で深い学び」

幼児期における「主体的・対話的で深い学び」とは審議の取りまとめにおいて以下のように表記している。（表1）

表1 幼児期における「主体的・対話的で深い学び」の視点 中央教育審議会

主体的な学び	周囲の環境に興味や関心を持って積極的に働き掛け、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って、期待を持ちながら次につなげる学びが実現できているか。
対話的な学び	他者との関わりを深める中で、自分の思いや考えを表現し、伝え合ったり、考えを出し合ったり協力したりして自らの考えを広げ深める学びが実現できているか。
深い学び	直接的・具体的な体験の中で、「見方・考え方」を働かせて対象と関わって心を動かし、園児なりのやり方やペースで試行錯誤を繰り返し、生活を意味あるものとして捉える学びが実現できているか。

無藤（2018）は、幼児が深い学びに向かう姿とは「遊びに夢中になり、時には偶然も生かしながら環境への思い入れを強くし、各自がその遊びへの目的を明確に持ちながら互いに考えを出し合う中で、もっと楽しく面白くしようと工夫して進めるようになる姿」とし、「幼児期の深い学びは、幼児理解に基づき、予想外の幼児の『見方・考え方』をも受け入れ、常に幼児と共に遊びを創造し、その体験の質を高めようとする教師の深いまなざしに支えられている。」としている。

これらのことから、本研究においては主体的な学び、対話的な学びの過程が深い学びを生み出し、その過程が更なる主体的な学びを生み出すと捉え、主体的な学び、対話的な学びを生み出す環境構成と援助の工夫を行う。

2 主体性を育む為の環境構成と援助の工夫

(1) 幼児理解に基づく意図的、計画的な環境構成

教育・保育要領解説において「園児の主体的な活動の為の環境を構成することは、一言で言えば、園児を理解することにより可能となる」と記されている。園児を理解すること（幼児理解）に関して無藤（2018）は、園児一人一人が「何に興味を持ち」「どのような経験をし」「何を感じているか」等、保育教諭が多様な視点で捉え続けることとしている。保育教諭の幼児理解によって、環境構成や援助が適切なものとなることから「幼児理解が保育の出発点となる」とも述べている。

また、教育・保育要領解説では、一つの活動に没頭して取り組むことができることも大切で、「いろいろあり得る活動の中から、興味関心のある活動を選び取っていくことができるように、しかも、その活動の中で発達にとって大切な体験が豊かに得られるように環境を構成することが必要である。」としている。このことを参考に、意図的、計画的な環境構成の流れ（表2）と意図的、計画的な環境構成（表3）を作成し、研究に活用する。

表2 意図的、計画的な環境構成の流れ

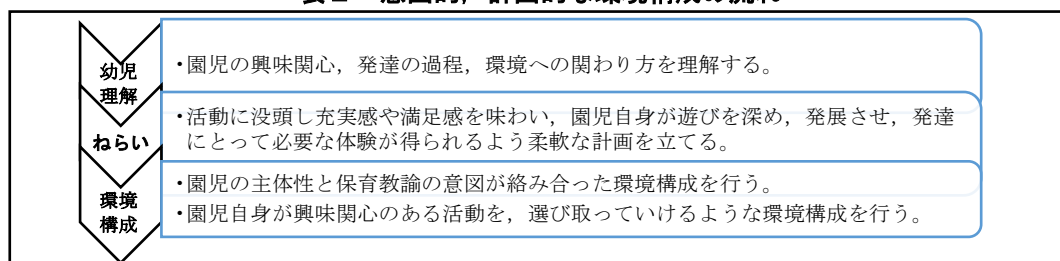


表3 意図的、計画的な環境構成

環境構成の視点	具体的な環境構成
【環境①】意欲が出る	・興味関心を持ち、「おもしろそう」「やってみたい」等の感情を持ち、思わず関わりたくなる環境構成
【環境②】関わる	・興味関心に即した遊びと、十分な時間の確保と道具の数や種類が工夫された環境構成
【環境③】見通しを持つ	・対話を通して、園児の興味関心を捉え、保育教諭と園児と一緒に作りあげていく環境構成
【環境④】連続性・試行錯誤・繰り返し	・戸外と室内の遊びの連続性を意識した環境構成 ・試したり工夫したりすることが生まれやすい環境構成 ・興味関心のある活動にじっくり取り組める環境構成
【環境⑤】共有する理解を深める	・園児の遊びやつぶやき等を写真や文章で可視化し、園児、保護者、保育教諭が遊びを共有できる環境構成 ・保育教諭間で遊びや経験したことを共有し、幼児理解を深める環境構成

(2) 発達特性に応じた援助のあり方

教育・保育要領解説において「保育教諭等は、園児が自ら主体的に環境と関わり自分の世界を広げていく過程そのものを発達と捉え、園児一人一人の発達特性（その園児らしい見方、考え方、関わり方など）を理解し、その

表4 発達特性に応じた援助と予想される園児の姿

援助の視点	発達特性に応じた援助	予想される園児の姿
〈援助①〉 認める 共感する	- 園児と一緒に遊びを楽しむ、楽しさを共有することで、一人一人の安心感や安定感に繋げる。 - 園児のつづやきを聞き取り、その時の気持ちや考えと一緒に振り返る（言語化する）。 - 園児が自分の遊びを振り返り「明日は〇〇しよう」と見通しがもてるよう援助する。	- 温かく見守られているという安心感を持ち、安定した気持ちで遊ぶようになる。 - 楽しい、嬉しい、やってみよう等の感情を持ち目的を持って遊ぶようになる。 - 充実感や満足感を得て「こうしてみたい」「こうしよう」等遊びに期待感を持つようになる。
〈援助②〉 繋ぐ	- 友達と関わり合えるよう遊びと遊びを繋ぐ。 - 園児と一緒に遊び、友達との関わりを通して新しい遊びに興味関心が広がるよう援助する。	- 思いや考えを伝え合い、協力、役割分担して遊ぶようになる。 - 友達や保育教諭と一緒に遊び、イメージを共有して自ら遊びに関わるようになる。
〈援助③〉 試行錯誤 を生む	- 園児の姿から思いや考えを見取り、園児と一緒に考えたり、友達に聞いてみたりしながら試したり工夫したりする。 - 園児の気付きや発見を共有し、遊びの面白さが分り、更に深められるように一緒に活動する。	- 遊びの中で友達と一緒に考えたり、試行錯誤したりして遊ぶようになる。 - 友達の遊びと自分の遊びの良さを合わせて新しい遊びを創り出すようになる。

特性やその園児が抱えている発達の課題に応じた指導をすることが大切。」と記されている。そこで、発達特性に応じた援助と予想される園児の姿について表4を作成した。

(3) 振り返りの場について

教育・保育要領解説において「園児は生活の中で心を動かされるような体験したときに、それを親しい人に言葉で伝えたいくなる。」と記されている。遊びを通して園児の心が動き「言葉で表現したくなる体験」を重ね、保育教諭や友達に言葉で伝える楽しさが味わいながら、遊びへの見通しや期待に繋がる振り返りの場を設定する。その際、1対1の対話から次第に友達同士で話し合うというように、園児の経験に応じた場の設定となるように留意する。具体的な援助に関して表5を作成し研究に活用し実践していく。

表5 振り返りにおける具体的な援助と予想される園児の姿

援助の視点	具体的な援助	予想される園児の姿
《振り返り①》 認める・ 共感する	- 聞いてもらって喜びが味わえるよう、一人一人の気付きや発見を認め、共感する。 - 自分の思いを言葉で表現することの楽しさが味わえるよう、個別もしくは小集団の中で話す場を設け、話に共感する。	- 話を聞いてもらえたことを喜び、自分から保育教諭や友達に話すようになる。 - 園児自身が考えたことや感じたことを喜んで友達の前で話すようになる。
《振り返り②》 繋ぐ	- 自分の思ったことを話したり、友達の話の聞いたりすることで、友達との関わりを楽しめるように援助する。 - 友達の話の聞いて、遊びの楽しさを共有できるようにする。必要に応じて保育教諭が言葉を補う等、仲介役となる。	- 友達と一緒に遊びを通して感じたことや考えたことを伝え合うようになる。 - 友達の遊びの楽しさを知り、友達と一緒に遊びを楽しむようになる。
《振り返り③》 試行錯誤を生む	- 発見したことや気づいたことを、友達にやって見せたり、作った物を見せたりして共有できるような場の設定を行う。 - 友達の話の聞いて「なぜ」「どうして」と一緒に考えたいくなる言葉掛けを行う。	- 遊びに没頭し、楽しかったことや考えたことを友達に伝えたいという思いで、振り返りの場に喜んで参加するようになる。 - 友達の遊びを見て、一緒にやってみたり、考えたりする楽しさが分かるようになる。

V 保育実践

1 保育計画

(1) 実態把握（4月、5月）

日頃から、多くの園児が思い思いに自分の好きな遊びを楽しみ、戸外では、色水遊びや砂遊び等の素材が変化する遊び（水の色、砂の硬さ等）へ興味関心を寄せている。その一方で、友達との関わりが少ない園児や、遊びを転々とし同じ遊びが長続きしない園児、自ら遊び始めることができず、特定の友達や保育教諭の後を追って、遊び始めるのを待っている園児もいる。

遊びの内容としては、固定遊具（ブランコ、ジャングルジム等）で遊ぶ園児が多く、自ら遊びを作り出すことが少ない。さらに、ほとんどの園児が友達はどうの遊びをしているか、どのように楽しんでいるかに関心を示していない。

(2) 保育計画

園児の実態から幼児理解を深め一人一人の主体性を育む為、発達の過程に応じた実践となるよう、6月中旬から下旬の期間を実践1、6月下旬から7月上旬を実践2とし、活動名とねらいを

下記のように設定し実践に取り組んだ。

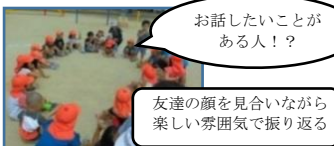
活動名	ねらい
実践1「自分が好きな遊びを十分に楽しもう！」	喜んで周囲の環境に関わる。
実践2「イメージを持って、繰り返し遊びを楽しもう！」	自ら環境に関わり、試行錯誤して遊ぶ。

2 実践1「自分が好きな遊びを十分に楽しもう！」(6月中旬～下旬)

(1) 環境構成と援助

実践1では保育教諭が色水遊び、石けん遊び、砂遊び、虫取り等の遊びと一緒に関わる。園児が安心感や安定感を持ち、夢中になって遊ぶ姿から興味関心を捉え、環境構成と援助の工夫を行う。また、遊びや片付けの中での関わりにおいて対話を大切にすることで、明日の遊びへの期待に繋がるようにする。言葉で表現したい気持ちが生まれやすいよう、戸外遊びの直後に話し合いの場を設ける。その時の気持ちを園児なりの言葉で表現し、その楽しさを味わい、友達や保育教諭に認められる機会や遊びを共有する機会を作る。写真を使った表示を教室に掲示し、園児同士、園児と保護者が遊びを振り返り、楽しさを共有できるようにする。保育教諭は写真を基に幼児理解を深め、環境構成や援助に反映させる。(表3, 4, 5で示した環境構成、援助は遊びを通して総合的に行う点に留意する。)

(2) 実践1(6月中旬～下旬)を通しての園児の変容と環境構成、援助

ねらい	喜んで周囲の環境に関わる
安心感や安定感を持って遊び出し、関わりたくなる環境構成と援助 □環境構成 □保育教諭の援助	
□ひとつひとつの遊びの中で、園児の遊ぶ姿から興味関心を捉え、道具の種類や数の調整などを工夫し遊びの充実を図る。 □色水や石けん遊び等、素材の変化を楽しむ遊びは、繰り返し遊べるよう素材を十分に用意する。 ○砂場での遊びは対話や道具の貸し借りが生まれやすく、友達とイメージが共有しやすいことから砂場に関わる時間を十分に確保する。 ○遊びと遊びを繋ぎ、友達との関わりを通して、友達の遊びを知り、興味関心が広がるような援助を行う。 ○「明日の遊びへの期待」や「園児同士の共有」に繋がるように遊びや準備、片付けの中で対話し園児の興味関心を捉える。	重点を置いた環境構成、援助等の視点 【環境①：意欲が出る】 【環境②：関わる】 〈援助②：繋ぐ〉 〈援助②：繋ぐ〉 《振り返り①： 認める・共感する》 《振り返り②：繋ぐ》 《振り返り②：繋ぐ》 【環境⑤： 共有する・理解を深める】 【環境⑥： 共有する・理解を深める】
 お話したいことがある人！? 友達の顔を見合いながら楽しい雰囲気振り返る  その日の出来ことや経験したことが分かる表示	

◇実践1(6月中旬～下旬)を通しての園児の変容

「おもしろそう」「やってみたい」という思いをきっかけに、園児が自ら遊びに関わったこと、そこに安心して過ごせる場があったことが「自分が好きな遊びを十分に楽しむ」姿に繋がった。保育教諭と一緒に遊ぶことが園児の安心感や安定感となり、自ら周囲の環境に関わる姿に繋がった。



◇保育教諭と一緒に遊ぶ楽しさを味わい、一人一人やりたい遊びを見付けはじめた。
◇道具の種類や数の調整により友達とのかかわりが増えてきた。



◇繰り返し何度でも遊べるよう、材料を十分に準備したことで、試したり工夫したりを繰り返し楽しむようになった。



◇遊びの直後に振り返りの場を設けたことで、自分の思ったことを言葉で表現しやすくなり、表現する楽しさが分かるようになってきた。



◇遊んだ場所で振り返ることで、友達の遊びを見て、「やってみたい」「おもしろそう」等、興味関心に繋がった。

(3) 実践1における園児の変容（抽出児）

	園児の姿（4，5月）	園児の変容	保育教諭の見取り
A児 (女児)	- 自分の思いを表現することや友達との関わりが少ない。 - 特定の友達Y児と一緒にいることで安定している。	友達と一緒に山作りを楽しみ、自分の背丈と山を比べ、「山が大きくなってきた」と喜んでいる。Y児と一緒になくても砂遊びを自分で選んで楽しむようになった。	保育教諭や友達と一緒に遊ぶことで、充実感や満足感を味わい、自ら遊びに関わるようになってきた。遊びに没頭することでY児に拘らず色々な友達と遊ぶようになってきた。
B児 (女児)	- 特定の保育教諭と一緒にいることで安心している。 - 担任以外の保育教諭が話しかけると不安そうな表情でうなずいたり首を振ったりして意思表示をしている。 - 担任がしている遊びに参加することが多い。	- 友達や保育教諭の遊び方を見ながら自ら遊びに参加するようになってきた。 - 友達が作った色水を見て「コップに入れて」と自ら声を掛ける等、友達との関わりが増えてきた。	- 友達の姿を見て「やってみよう」という思いから自ら遊びに参加するようになってきた。 - 本児の言葉を十分に受け止めて認める援助を行ったことが、特定の教諭以外にも「先生見て」と自ら声をかける等、他者に関わる姿に繋がった。
E児 (男児)	- 集団での活動には参加しているが、友達や担任と関わることがほとんどない。 - ブランコ等の固定遊具を一人で楽しむことが多い。 - 自分から友達と関わったり、遊びに参加したりすることが少ない。	- 保育教諭と一緒に砂遊びをしたことをきっかけに友達との関わりが出てきた。ブランコで遊ぶこともあるが、満足すると友達との遊びにも参加するようになった。 - 振り返りの場での質問に言葉で応えるようになった。降園時、お迎えに来た母親に「戸外遊びでの出来事を話すようになった。」	- 本児の発達に応じて援助したり、一緒に遊んだりしたことが、安心感に繋がって遊びや活動に自ら参加するようになった。 - 本児が考えた遊びを振り返りの場で友達と共有する機会を設けたことをきっかけに、自ら遊びに参加するようになった。

(4) 考察

園児との関わりや対話から幼児理解に努め、環境構成と援助を行ったことで、期待や意欲を持って園児自身が好きな遊びを選び、遊ぶようになった。園児の前向きなつぶやきや主体的な行動を保育教諭が捉え、言語化して共有することで、園児自身が次の活動への期待を持って行動するようになった。また、写真による遊びの共有は園児同士や家庭での対話にも繋がったようだ。

振り返りの場においては、言葉で表現することや友達の話聞くことを楽しみ、ほとんどの園児が自ら参加するようになった。友達の遊びを共有することで、これまで経験したことのない遊びへの興味関心となり、実践1のねらいである「喜んで周囲の環境に関わる」姿に繋がったと考える。

3 実践2「イメージを持って、繰り返し遊びを楽しもう！」（6月下旬～7月上旬）

(1) 環境構成と援助

園児の興味関心が高い戸外での色水遊び等を、室内にも設定する。室内でこれらの遊びと出会うことにより戸外と違った素材の性質に触れ、関わり方が変わり、試行錯誤する場面が生まれると考える。また、新しい発見や発想により園児自身が室内、戸外で新しい遊びを展開するであろう、という意図を持って室内の環境構成を行う。その際、廃材を使った製作遊び等、室内での様々な遊びへの興味関心も見逃さないように留意する。更に、室内と戸外での遊びを通して「自分から関わる」「試行錯誤する」等が「言葉で表現したくなる体験」となり、振り返りの場において言葉で表現する楽しさを味わったり、友達の話聞いて共有したりする機会を大切にする。

(2) 実践2（6月下旬～7月上旬）を通しての園児の変容と環境構成、援助

ねらい	自ら環境に関わり、試行錯誤して遊ぶ
試行錯誤、発見を生み出す室内環境構成と援助 ☐ 環境構成 ☒ 保育教諭の援助	重点を置いた環境構成、援助等の視点
 見て見て！ 泡が硬くなったよ！ 試行錯誤を生み出す □色水遊びと石けん遊びは戸外と同じような環境を室内に構成し、「道具の使い方」や「必要な道具」について園児と対話し、気付いたことを環境構成に反映させる。 □水の使用量が変わることで、色水の色や石けんの泡の変化が生まれることに気付くよう小さな水差しを用意する。 ○色水、泡に対する興味関心が高まり、試行錯誤するきっかけを作るための援助を行う。 *色が変わる（石けん水、レモン水）、泡が固くなる（砂糖） ○発見したことを、一緒に遊んでいる友達と共有する、自分たちで新しい遊びを展開する姿に繋ぐ。	【環境③：見通しを持つ】、 【環境④：連続性・試行錯誤・繰り返し】 〈援助③：試行錯誤を生む〉 《振り返り③：試行錯誤を生む》

 楽しさを十分に味わい 試行錯誤、繰り返しへ Eさんが大発見したよ！ お友達に紹介してくれるかな！?  作った物を見せて 楽しさを共有する	□砂場で桶を使った遊びがイメージできるよう、ビー玉転がしのコーナーを室内に設定する。 ○保育教諭と一緒にビー玉がゴールまで到達する楽しさを十分に味わう。 ○ビー玉転がしと砂場での桶を使った遊びの共通点に園児自身が気付くような言葉掛けを行う。(傾斜により転がる等) □園児の気付きを遊びに取り入れることができるように色々な道具を室内に準備しておく。(傾斜を作る為に必要な道具やレールを延ばす為に使うことが出来る廃材等) ○戸外室内共に、振り返りを遊びの直後に行い、発見したこと面白かったことを友達に話したり、作った物を見せたり、遊びを見せたりする。 ○園児の発見や試行錯誤する姿が、次の遊びの見通しや期待となるよう保育教諭が言葉を補いながら共有する。 □写真を活用した表示を作成し、共有や理解に繋げる。	【環境④：試行錯誤、繰り返し】 《援助①：意欲が出る》 《援助②：楽しさを味わう》 【環境④：試行錯誤、繰り返し】 《振り返り②：繋ぐ》 《振り返り③：試行錯誤を生む》 【環境⑤：理解を深める】
◇実践2（6月下旬～7月上旬）を通しての園児の変容 戸外遊びと並行して室内でも遊んだことで、試行錯誤が生まれ、室内遊びでの発見を戸外遊びにも取り入れて、これまでとは違った遊び方で楽しんでいる。次の遊びへの見通しとなり、新しい遊びを生み出した。  色水遊び ◇園児自身が水の量を調整し綺麗な色水作りを繰り返すことで、色への興味も高まり、色水の種類が増えた。  石けん遊び ◇水の量により、泡の硬さが違うことに気付き、遊びに合わせて泡の硬さを作り変える等、自ら遊びを展開させるようになった。  砂遊び ◇ビー玉転がしの経験から、桶と水を使って色々な物を転がす遊びを繰り返した。 ◇桶の傾斜角度を工夫して、水の勢いを変える等、試行錯誤して遊ぶようになった。  振り返り ◇「言葉で表現したくなる体験」をし、思いを表現したり、遊びを見せたりする等、表現する楽しさを十分に味わえた。また、友達との遊びの共有にも繋がり、園児同士のかわりも増えた。		

(3) 実践2における園児の変容（抽出児）

	園児の姿（6月下旬）	園児の変容	保育教諭の見取り
A児（女児）	- 色水や石けん遊びにも興味を持ち、遊びの中で友達との関わりが増えてきた。 - 戸外で色々な友達と一緒に遊ぶようになり、協力したり、対話したりして遊ぶようになってきた。	- 室内の石けんコーナーでじっくり石けん遊びに関わったことで、自ら遊びを選んで楽しんでいる。水を少量ずつ入れて、硬い泡を作って「<u>明日はケーキを作る</u>」とイメージを持って繰り返し遊ぶようになった。 - 戸外では水を多く使用して柔らかい泡を作り、「<u>柔らかくしたからシャボン玉ができるよ</u>」と言葉で表現し、自ら遊びを展開するようになった。	- じっくり関わるができる環境と時間の設定、試行錯誤を生み出す援助により、物との関わり方、遊び方が変化し、試行錯誤しながら、繰り返し遊ぶ姿に繋がった。 「言葉で表現したくなる体験」を、小集団の中で表現する機会を多く設けたことが、言葉で表現したり、自ら遊びを展開したりして、遊ぶ姿に繋がった。
B児（女児）	- 室内での石けん遊びやビー玉転がしで、泡の硬さやビー玉の転がり方の違いに気付いた。担任保育教諭との対話では、その違いを話すことができた振り返りの場では話したがらなかった。 - 振り返りの場において、友達の話に興味を持って聞いている。	- 砂場で桶の傾斜を利用して様々な物を転がす新しい遊びを展開し、必要な道具を友達と考えたり「<u>発表もして、遊びも見せたい!!</u>」と自ら訴えて、振り返りの場で遊びを実際に見せたりすることができた。 - 本児の母親の話では、家庭で「<u>発表の練習をしたいからお母さんは先生の役をして欲しい</u>」と、振り返りの場を家庭で再現し練習する等、見通しや意欲を持って遊びや活動に関わるようになった。	「発表したい」という本児の希望を受け止め、振り返りの場を砂場に設定したことで、表現しやすい環境で発表する姿に繋がった。 - 室内で様々な遊びにじっくりと関わり「友達や先生に言いたい!!」という経験が意欲となり、家庭での姿に繋がった。 「やってみよう」「おもしろそう」は生活を通しての行動の変化にも繋がった。
E児（男児）	- ビー玉転がしに興味を持ち、「仲間に入れて」と自分から関わっていくようになった。 - 友達の遊びを傍で見て楽しんでいることもあるが、友達に自分から声を掛けることが多くなった。	- ビー玉転がしに自らのタイミング（人数が少ない時）で参加し、必要な道具を準備して場の設定をし「<u>準備出来たよ</u>」と友達に伝えるようになった。 - ままごとコーナーで、友達で作った色水を使ってのごっこ遊びをきっかけに、色水作りにも興味を持ち、色水を作って楽しむようになった。 「どろぼうごっこ」と名付けた鬼ごっこを考え出し、友達を誘い楽しんだことを<u>発表した</u>。本児のイメージや期待を持って遊ぶようになった。	- 本児のタイミングや興味関心を尊重し、必要に応じて援助を繰り返したことで、好きな遊びを見付け、友達との関わりが増えたことで、新しい遊びを展開するなど自ら周囲に関わる姿に繋がった。 - 振り返りの場で本児が話す機会を多く設けたことで、他児からも本児の遊びが見えて互いに興味を持ち始めてきたことで、関わりが増えてきている。

(4) 考察

興味関心の高かった水を使った遊びを室内に設定したことで、園児自身が試行錯誤して遊びを展開し、道具や素材の使い方が変わった。そのことにより、室内・戸外で新しい遊びを生み出し、発見や試行錯誤、繰り返して遊ぶ姿に繋がったと考える。

環境構成と援助の工夫により「言葉で伝えたいくなる体験」を積み重ねたことと同時に、振り返りを遊びの直後に行ったことで、園児自身が心の動きを言葉で表現しやすかったと思われる。また、使った道具や作った物を見せながら話すことで、遊びや興味関心が共有しやすくなり見通しや期待

を持って主体的に遊びに参加する姿にも繋がった。遊びの途中で発見したことや面白い出来事を、園児の必要感に応じて、その場で共有したことも遊びや園児の興味関心の広がりにつながったと感じることから、今後も継続していきたい。

VI 実践を通しての考察

「自分から関わる」「自分で遊びを展開する」「試行錯誤する」「繰り返す」「自分で選ぶ」「思いや考えを言葉で表現する」という点を主体性と捉え実践に取り組んできた。実践1において、保育教諭が園児と一緒に遊びに関わりながら幼児理解を深め、環境構成や援助の工夫を行ったことで園児は安心感や安定感を持って好きな遊びを自分で選び、繰り返し楽しみ、充実感や満足感を得ることができたと考える。そのことが実践2のねらいである「自ら環境に関わり、試行錯誤する」姿につながったと考える。

「主体的・対話的で深い学び」の視点を持ち、園児の様々な姿から幼児理解を深め、環境構成と援助の工夫を行ったことで、園児自身が遊びの過程の中で様々な環境に自ら関わり、「見方・考え方」を働かせ、試行錯誤を繰り返しながら、深い学びへと迫る姿を生み出したと考える。

また、「言葉で表現したくなる体験」を積み重ねた園児達は、振り返りの場の工夫により、感じたことや考えたことを言葉で表現する楽しさを十分に味わい、自分の話を聞いてもらう経験ができた。話を聞いてもらうことにより、自分も人の話をよく聞こうとする気持ちになるという発達の過程があるように、今後は学級全体が人の話を聞き、自分の経験したことや考えたことを話す中で、相互に伝え合う喜びを味わうようになっていくと考える。

VII 成果と課題

1 成果

- (1) 幼児理解に基づく環境構成と個に応じた援助により、園児が安心感や安定感を持って遊びに没頭する姿につながった。幼児理解と環境構成と援助の工夫を繰り返したことで園児が自ら様々な環境に関わり、主体性の育ちに繋がった。
- (2) 環境構成と援助の工夫により園児が「言葉で表現したくなる体験」を重ねたことと、振り返りの場を遊びの直後に設けたことにより、園児が言葉で表現する楽しさを味わった。そのことが友達とのイメージの共有、見通しや期待を持って遊ぶ姿につながった。

2 課題

- (1) 一人一人が主体性を発揮して、自ら好きな遊びや周囲の環境に関わることをねらいとして実践に取り組んできた。今後は、共通の目的に向かって一人一人が主体性を発揮し、協同的な活動や遊びの展開に繋がる環境構成や援助の工夫に取り組んでいきたい。
- (2) 振り返りの場は、「言葉で表現したくなる体験」を基に園児の言葉を引き出す援助を行った。今後は、園児が言葉のやり取りを楽しめるような援助を行い、園児同士の対話が広がる振り返りの場を作っていきたい。

《主な参考文献・引用文献》

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』内閣府・文部科学省・厚生労働省	フレーベル館	2018
『育てたい子どもの姿とこれからの保育』	無藤 隆	ぎょうせい 2018
『発達』150	杉田 啓三	ミネルヴァ書房 2017